

# おおやまと

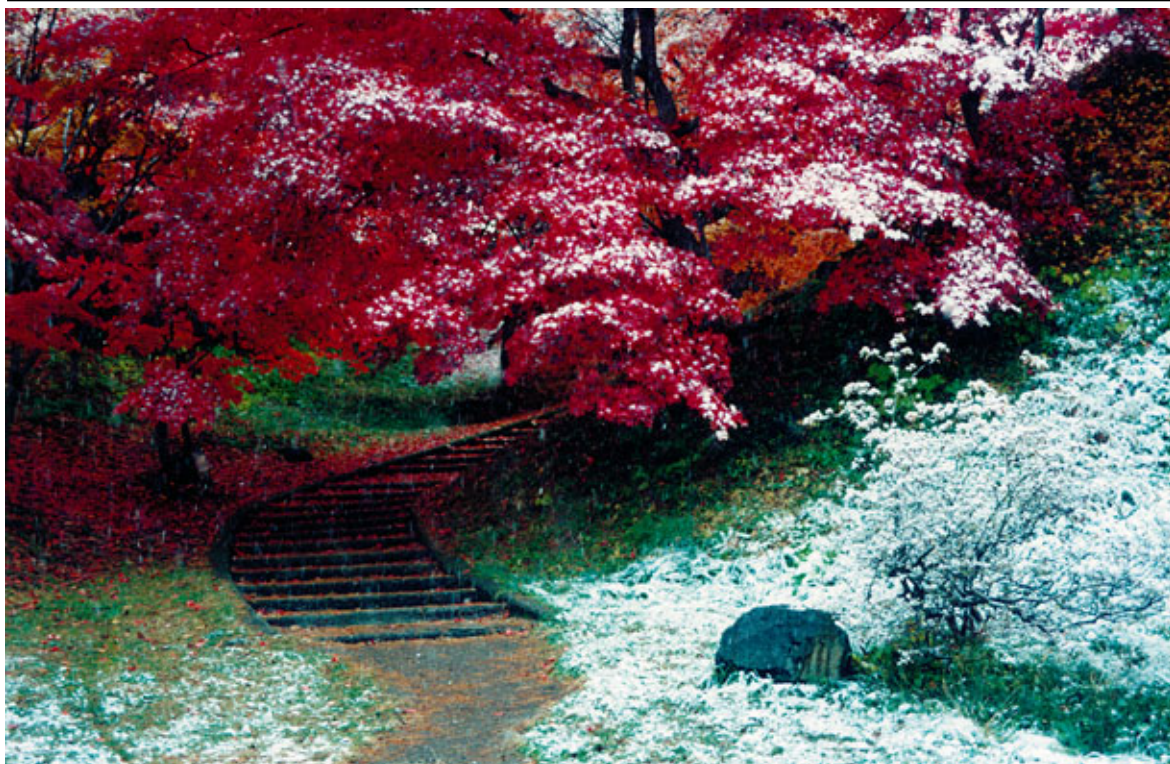
大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成19年  
11月号

毎月23日発行  
通巻447号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成19年11月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷 監  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



初雪 青森県弘前市 石田勝利さん撮影(文・4頁)

昭和45(1970)年11月23日 月次祭法話より

## 形に惑わされない信仰を

法主 矢追 日聖(満58歳)

### 文化行事の意味

今日は誠によいお天気でございます。秋のお天気というものは、非常に清しくて気持ちがいいんですけれども、このあいだから割合にお天気が悪うございました。えらい勝手な言い方かもしれませんが、そういうような状態が続いていたからこそ、今日は結構なお天気だと言えるんです。

昨日も非常に恵まれたよいお天気の日でしたが、大倭へ集まって来る方やその関係者の方と、大野の神奈備へお参りに行きました。室生口の「大野」でございますが、伊勢の方へ参ります近鉄電車だと、榛原のひとつ向こう側ですから、関西の方は場所が大体お分かりと思います。

大野に行きますと、大野寺とか、寺の対岸に磨崖仏(※岩壁に彫刻された仏像)がございます。そういうようなものを観光の対象として行かれる場合も多いと思います。

現地において私もちよつとお話ししましたけれども、大倭へこうして集まってくる方は、一応何らかの形で宗教を求めるとか信仰するとか、そのようなつもりでおいでになっていると思う。その時に、なぜあまり人が注目しないような大野の山とか、人の行かないような草の生い茂つておるような場所へ、みんなと連れ立って大倭の連中は行くんだらうかというところに、ひとつの考え方を持っていて欲しいと思うんです。

月次祭の後には、お決まりのように三十分という限られた時間の中で、何年間か続けて話してきています。また『すさのお』紙にも、何か訳の判らんことを毎月書いておきます。それをあなたたちは、お読みになっていると思うんですけれど、話を聞いたり書いたものを読むというだけでは物足りないものがあるんですね。やはり目で見る、現地に行つて肌に触れる、そうすることで、話を聞くとか文章を読むとかではない、別の感じ方や捉え方が出来るんですね。

私がおんなの所へいつもご案内するということとは、もちろん信仰の対象のひとつとして参るんです。しかし、そうした場所には何千年来の歴史があり、文字に書かれてもいないし口伝されてもいないけれども、長い年月の間に、いろいろな思いをした人が何かを残しているんです。無形のものがたくさんある。現地に行くと、やっぱりそういうようなものに触れなきゃいけない。

だから、古くからある神聖な場所を、古代人の心も知らずにやたらに破壊し荒らしていくということとは非常にもつたいない。これは観光地としてとか、文化財保存というような打算的な意味じゃありません。心の保存というものは形を通して保存しなければならぬと思うからです。

それと同時に、これが一番大切なことですが、そういう場所へあなたたちが行つたとき、現在でも多くの人々が信仰している宗教の世界において、自分の信仰心というものは、一体どのような位置にあるのだろうと考えてみてほしいんです。これは自分の精神内容を主体として言っているんです。

あなたたちは、こういつた祭典に参加して手を合わせておるが、一体自分は何かのために大倭へ来ているのか。自分の信仰の程度や内容を、大倭の

この場所以外の所で反省してみる。そのひとつの道場として、あなたたちと共に草花々と生い茂つたような場所へ足を向けているんです。まあ、あなたたちの中にはここに昔何があつてどんな神社であつてという、名所旧跡を巡るようなつもりの方もいるかも知れません。それも結構です。

私はいつでも、そのような場所の中において二十分なり三十分なり現地です。ガイド的な面ももちろんございますけれども、話す内容は、常にあなたたち自身の問題についてです。この場所に来た時に、自分の現在の心境とか自分の信仰の態度とか、そういうものを必ず反省することをお勧めします。

私はもう六十歳になりましたので、大倭教設立当時の心境を今月号の『すさのお』に二ページに亘つて書いておきました。ここへ十年あるいは二十年足を運んでいる方もございます。聞く方は変わつておるかもしれませんが、私自身の心情というものはひとつも変わっていない。同じことばかり言っているつもりなんです。

### 神意を伺つ神奈備の信仰

大野の神奈備は、古代から現代に至る日本人としての信仰の流れというものを、標本のように形で残している場所です。

形で残していることは、その時代の人が信仰した心の表れです。だから、信仰心というものが、どのような形において今日まで変化してきているのかということ、室生の神奈備をみればよくわかることなんです。

現在の大倭の信仰のあり方というものは、当時の日本人の先祖たちが神奈備を信仰しておつた心の持ち方という、最も古い精神的な面を受け継いでいるはずなんです。

精神内容というものは五千年あるいは三千年変わらざる昔の人と同じというわけにはいきません。けれども、それに近づこうよう修練すること、非常に必要だと思ふんです。その形を残しているのが、室生の神奈備です。

その時代には、人間生活一式全部を神奈備中心の信仰でもつて支えていた。もちろん利害にも結びついております。神の心を知る、所謂神意を伺つて、神様の心の通りに人間がついていく。そういうような信仰の時代が、神奈備時代の信仰です。

農耕の問題であつても雨が欲しいとか、あるいは風が吹く、雷が鳴るなどは人間の生活と密接な関係があつたんです。だから、現在あちらこちらに見ます神奈備の信仰というのは、社会の全てが農耕を基準として生活していた当時の信仰の形なんです。

それ以前の、山岳地帯で生活しておつた時代には、生駒の山のような大きな山そのものが神聖な神様だつたんですね。所謂大型の神奈備です。けれども低地におりてきて、農耕によつて生活を支える時代になつてきますと、小型の神奈備がその集落ごとに必ずあつたんです。その神奈備というのは、御陵とか古墳のように人間が作つたわけではなく、自然に出来上がった山で、それが現在でいう「お社」なんです。大倭でいう信仰は、この時代までのことに私はとどめておるんです。

我々人間の肉となり血となるような意味の、日常生活に結びついておる信仰というものには、結末も理屈も何にもいらないんです。当時の、神奈備が信仰されておつた時代は、ただ神さんの心を伺い、その心に沿つた生活をしていくだけなんです。そういう時代には、もちろん神様の気持ちを伺う神憑りのような人もたくさんおりました。

## 変化していく御霊鎮め

やがて、時代は農耕文化から物質文明というものに変化していきます。発展してきているといえれば発展ですし、退化といえれば退化ですけれども、農耕中心の生活が変化してきている。そうなってくると、だんだんと人間の都合のいいように神さんをもてあそぶようになってきている。奈良朝の頃から神社の本殿が出来てくる。それ以前の磐座とか、あるいは神籬という形をとって神祀りをしたというように、古代の人との考えとは大分変わってきている。

古代人は山などの中に神さんがお籠もりになっていると考えていたんです。「御室」とは神さんになってくると場所をいう。それが「森 杜」になつてくるんです。そのような所なんだから、山が動かのと同じように、そうやたらとあつちこつち持ち歩いてよいもんじゃありません。

その後、仏教が出てまいりますと、堂塔伽藍が出来て仏像が安置される。それをまた神さんの方も真似し木造建築を始める。その中へ御霊を鎮める。人間は鎮めているつもりかも知らんけれど、神さんの方では分かりませんよ。そういうように、齋い込めると永久に神さんはそこにいるということになってくる。だんだんと人間の神さんに対しての態度が得手勝手に変化してくる。

この間吉野の大名持神社にあなたたちと一緒に参った時なんか、これまた典型的な話が宮司さんからあつたように思う。何千年か何万年かの間、妹山という山そのものが御神体ですから、神聖な場所と信じられてきた。ところが、明治の初期の頃に本殿を造って神さんを鎮めてしもたというか、鎮まつてもらった。神さんは本殿にいらつし

やるんやから、もう山に登っても構わないんだというように、人間の考え方で変わってくるんですね。

貞観年間の時には正一位の位をもらつたと、宮司さんは喜んでました。その当時の、俗に言う官幣大社よりも位が高いんです。位としては最高ですよ。けれども、人間が神社を捉えて正一位とか従一位とか、そのような格式をつけていくというのも、ほんま考えようによつてはおかしいです。もうその頃になってくると神社仏閣というものは、その当時の社会的な権威者の道具だつたということになるんですね。それでも宮司さんも喜んでるんやから、それはまあ結構ですけども、神さんに対しての態度が問題なんです。

### 本当の信仰とは

本当の信仰というのは、神さんなんかは問題じゃないんですよ。宗教とか信仰というものは、生きている現在の私たちの問題なんです。

大倭に来られる時に、ただ手を合わせて聖歌を歌うことによつて何かのプラスになるといふようなことを考えていたら、大倭の神さんは泣かれます。分かり易く言つたら大倭はそんな所じゃないんです。

我々は神さんの心というものに触れることによつて、自分自身が神さんの心に近づいたために、こういうようなお祭りという機会をつくっているんです。これは、みんな自分のことなんです。

この世になにひとつ思い残すことなく死んでいく自分というものを作っていくことが、信仰の最終的なものではないかと思ひます。こうした共同体の社会の中で私たちが生活しているんですから、自分の意志でなくても苦痛とか心配事とかが、

よそから降りかかってくるんです。そういうようなことを、自分の中で簡単に消化できるようになつていかなければならない。これは、仏教で言う悟りということなんです。

仏教の悟りという話は非常に結構ですが、僧侶や出家者たちは何をしているのかということになるんです。これはまあ、人のことですから私には関係ありません。けれども、この間インドの人の話をして、がっかりしているんです。芸術家で、インド人の中でも優秀な人なんです。私のところに来まして、私が神ながらの話をしていけると、その人はヒンズー教と非常に近い宗教のようなので喜んでおつたんです。

そのときに、日本の仏教というものをあなたたちの目からみればどうだろうか、こちらの方から質問してみたいです。結論からいって日本には仏教はないと言う。何故かという、一番の宗祖であるお釈迦さんの真似が出来ている出家はひとりもおらんと言うんです。

お釈迦さんという人は、インドの王様の子供に生まれた人で、生活していくのに何ひとつ不自由なかつた。そのお釈迦さんが嫁さんも子供も自分の財産も、次の王様になる権威も全て捨ててしまった。それを出家と言っているんですね。お釈迦さんが捨てたものをひとつ残らず拾い集めて、自分につけているのが日本の出家だと言うんです。

私も出家の生き方に対しては、かなり毒舌も吐くし批判もするんですけども、インド人からきつい批判をされたのは初めてで、こちらが愕然としたんです。

出家した人が堂塔伽藍を一生懸命に維持している。そして普通の人が着ておらんような、金襴の衣をまとつて出て来る。儀式の時の姿を言っていると思うんですね。大きな殿堂の中に入って、自

分は一宗派の管長であるという権力と名誉を持つて座っている。そして、信者をひとりでも多く獲得することばかり考えている。これではもう仏教ではありませんと、それをものすごく批判しています。

けれども、日本人はそういうことに慣れていなくてですね。金欄の衣をまとって出てくると、立派な方だと姿を見て頭を上げる。大きな伽藍に入っていると、あそこの宗教はたいしたもんだとなる。大倭のように風が吹いたら飛ぶような所は、格好悪くて人も連れて来られんということになってくる。形によって宗教の内容や価値を決めてしまう。大倭に来る者は、少なくとも形にとらわれないで、この世に思い残すことのない自分というものを作っていつてもらいたいと思っています。

(文責 編集部)

### \* 表紙写真について \*

青森県弘前市 石田 勝利

もみじと言えば、秋をイメージするが、紅と白のコントラストがハッキリする初雪に限る。惜しまれるのは、この光景は5時間で終わる。

初雪は必ず融けてしまう、昼まではムリ。ピシヨピシヨ濡れの姿ほど哀れなものはない。1年に1回しかお目にかかれない。「今朝は寒いから、もう少し寝てよう」なんて言ってられないのです。

さて、『おおやまと』7月号、平将門の記事を興味深く読ませて頂きました。その1ヶ月前から「天慶の乱」のことばかり不思議に目に留まり、将門の素性を調べている最中に、また、この記事で、私自身に何の縁があるのか首を傾げています。相馬の馬追い、出羽山神社の五重の塔の創建等、平将門伝説は脈々と生き続けています。もっと識りたいのが本音です。

## 逍遥遊を求めて……

### 生まれておいでの巻

大阪府岸和田市 溝口 邦子

今年の六月、もうすぐ四歳になる息子は、生まれて初めての大きな心臓の手術を受けました。思いの外、術後の回復も早く、チアノーゼが少し改善されて以前より元気に動き回る事ができるようになってきました。

手術、入院と大変だった事を書こうと思つていましたが、ふと、息子が病氣とわかつた頃の事を思い出し、息子がこの世に生まれる前の頃を、つらつらと思いつくままに書きたくなりました。

長女、眞和倭は、自宅で元気に産まれた事もあり、次の子も必ず自宅で出産できると信じて疑っていなかったのですが、心臓の雑音により、みるみる間に大病院に紹介状が出されました。それは、妊娠八ヶ月頃です。宝くじが当たるより、すごい確率の病氣であることがわかりました。

「生まれた次の日には、放つておくと死にます。生まれたら、すぐに手術です。最終的なフォンタン手術ができる子供は十人いたら二人だけです」という医者の言葉に、私は嘘でしょう、と頭の中が、まっ白けになった事を思い出します。

だんだんと病氣の事を理解する内に、「なぜ、この子は生まれてくるのだろうか、苦しい事を味わう為に生まれてくるのだろうか、いつぞ、流産したほうがよいのではないだろうか」、夜になると、いろいろの想いが湧き上がり、涙が止まらない日々が続きました。そんなある日、病院でエコーを見せてもらった時、笑つてる顔がみえた(私がそう思つただけかもしれない)。「私のお腹の中が笑つている、そうか、生きてるんだね」

この時、私は、生まれてきたのなら、自分で考えて決めて生まれておいで、と素直に思う事ができました。「苦しい事にはかりあうのが嫌だ」と思うのなら、おなかの中で死んでもいいんだよ」と言いました。

もうすぐ、臨月と思えない程身軽になって元気になつている自分がいました。私が楽しい、素晴らしい、素敵だ、と思う事をドンドンやつて、共に喜び、楽しもうとひらき直りました。

例えば、徹夜でおはぎや天然酵母のパンをつくり、手づくり市に出店したり、自分の庭で、くわをふるい畑の畝をおこし、種をまいたり、我が家の犬六匹も一緒に車にのせて、家族全員で富士山をみにいったり……。と忙しくも楽しい日々を、祈るような気持ちで無我夢中で過ごしました。美しい雄大な富士山の全景を朝焼けと共に拝めた時は感激でした。

そしてこの子は、やつぱり、生まれたかつたのです。心音が下がつていきますという恐怖の音が、助産婦より何度もきこえたにもかかわらず、元気な元気なうぶ声をあげ、おっぱいを力いっぱい吸う力がある、病氣をしつかりとつた秀眞が十月二十日、朝六時三十分過ぎ、誕生しました。

生まれて次の日には死にますといわれた秀眞は自然の力に支えられて三歳八ヶ月まで手術もなく薬も飲まずに生きてくれました。そして今回、大きな手術を受け、もう四歳を迎えます。私は、いつも思います、長生きしてくれてるなあつて。

手術を終えて、もう退院という時に、祖父からよく頑張つたねとお祝いを頂いた時に、「おじいちゃん、僕はまだまだ、安心できないんだよ」と言つたそうです。又来年、フォンタン手術を控えている事が、ちゃんとわかつてる事に、私はびつくりしたのでした。

# 大倭あちろちろら (第21回)

## 大倭会館

### 大倭会館の歴史 「すさのお」紙より

昭和42(1967)年2月3日、地鎮祭。2月号で、鉄筋2階建ての設計図・完成予想図をそえて建設委員会が協力を呼び掛け。

同年6月1日より、まず食堂棟に着手。7月30日、交流の家竣工。

昭和43年2月23日、すさのお会発足。

昭和44年1月13日から、双葉館にあった邑の独身者の食堂を会館に移し、信人と共用開始。

昭和46年9月4日(東光大祭)、平屋のプレハブ建築となって竣工、現在に至る。

竣工にあたって法主さんは「宗教的殿堂は信仰者に害毒を流す」というタイトルで、「建物は現在大倭に集う人々の用に供する程度でよい。強制寄付は絶対行つてはならない。時機到来を待つてから着手すること。建物に所有意識を持つてはならない」などの、注意事項を書いておられます。

鉄筋建ては食堂棟までで、本体はプレハブ建てになったが、4年余りの年月をかけて完成されて以来約40年間、すさのお会 大倭一門 大倭会(※昭和59年4月8日、発足)が中心になって維持(近年は利用者に多少のカンパも頂くようになった)、時期によつて起伏はあるが利用され続けてきました。

### 大倭会館の今

①餅つき 食堂では毎月欠かさず、お祭の前日はお供えのお餅を作る。お正月は臼と杵だが、女手中心なので20年位前から餅つき器を使用する。

②喫茶倶楽部「和み」 ボランティアグループあじさいの箱が、空いていることが多くなった食堂棟を大掃除、ペンキ塗り直しなどして平成12年7月8日オープン。あじさいの箱の活動の拠点、邑の一つの和みの場として、根気良く続けて頂き今年、満7年が過ぎた。

月に1回、万葉集を読む集まりなどもある。

③あじさいの箱チヤリテイサークル 昭和63年3月の発足当初は、大倭殖産の3階を使用していたが、その後、大倭会館に移った。講師の先生方がボランティアで、講師料を福祉のために寄付して下さるので、安い月謝でサークルに参加するだけで、楽しみながら寄付に協力できるという活動。

書道 (月2回月曜午前) 写真①

英会話 (月2回月曜午後) 「カサブランカ」「レベッカ」など名画のシナリオをテキストに。

押し絵 (月1回金曜午前) 写真②

編物 (月3〜4回木曜午前。その作品だけ分らない時だけという部分参加も歓迎) 写真③

生け花 講師の都合で休止中だが、メンバーは月2回、菅原園への花生けボランティアを継続。

手まり (月2回火曜午前) 写真④

語り 定期の活動は休止中だが、時々、依頼があつて紙芝居でボランティアをしている。

あぢさゐの句会 (第2土曜午後) 少し違う形だが、チヤリテイサークルに准ずる。

「秋深し写経の背に遠汽笛」「蜘蛛の糸銀一筋の通せんぼ」「肩車かたぐるまのままに退場運動会」「蓮の花待ちて過ぎたり小半時」「髪切れば項撫うでなでゆく秋の風」「象潟の傘差さでいる秋時雨」「落中に夢落外に曼珠沙華」—— 10月の句会より

④捨石の会 囲碁サークル、月1回不定期。

基石を見たりに手にした事の無い人ばかりが「ぼけ防止」のために楽しんでいきます。会の名は「世

界平和の捨石になろう」という法主さんのお言葉を頂きました。九路盤を始め、現在は碁(五)ではなく、一か二というところ。⑤アレンジフラワー教室(第1土曜午後) / 又すか書道塾(月2回夜) など。

⑥宿泊 食堂棟の中の浴室は当初から不具合、寝具があるだけという状態だが寝泊りも一応、可能。入浴は交流の家で。

⑦その他、色々な人の集まりの場として。



② 来年の干支子



③ 自分の作品を着ています



④



大倭会館は、痛みも目立ちますが、創意と工夫で、気楽に親しめる器として今もなかなかの存在感です。いつか建て替えられるとしても、その雰囲気が続いてほしいと願います。(岸野春子記)

## 編集部 IN 愛生園

平成19年  
9月16・17日

「ライ」という言葉は子どもの頃から良く耳にしていた。そしてライ(ハンセン病)の後遺症が出た人たちも身の回りにおられ、何ら気にする事なく一緒に生活していました。

青 山 法 義

今年の春、編集部のネタ作り？旅行のスケジュールに長島愛生園が入っていて、何気ない気持ちで私は愛生園に足を踏み入れたのですが、園内を案内してもらっている内にどうしてももう一度ここに来たいという気持ちが強くなり、帰るなり李さんに「もう一度行こう」と声をかけました。今回も神谷さんにハンセン病の歴史のお話を聞き、ライにはまだまだ根強い偏見が残っている事を改めて感じた。文章や人伝えで話を聞くより、実体験を持った方の話を直接聞けた事は私にとっては得難い時間になったと思っています。

機会があれば『おおよまと』の読者の方たちにも是非直接話を聞いていただける機会がもてればと思います。

李 章 根

初めて長島愛生園に伊奈教勝さんを訪ねたのはもう十七、八年前の事です。在日のオモ二が「隠す事のない者の清々しさ」と話されていたのを思い出します。二十歳の何も知らない僕は「伊奈さんのような体験はないけど、命という共通のものをもっていきから繋がっていきける」と甘く無邪気な事を言っていました。あの頃は園内に何人もの方が歩いたり話したりしている姿を見かけましたが、今回はほとんど見かけませんでした。

お訪ねした神谷さん、小田さん御夫婦、金さんは、僕達を快く迎え入れてくれました。その雰囲気「ここには人間がいる」久しぶりにそう感じられたのは、人間世界の辛酸をなめ尽くしてこられたからなのでしょう。朝鮮ではそれを「恨」というのだと思います(単に恨みという意味ではない)。四人の方を支えてきたものは何だったのか。一番底にあつて人を支えるものって何だろう。

中 村 千 久 佐

今年は編集部の旅行で初めて愛生園を訪問させて頂き、その時に何か心に残るものがあつて再び九月に訪ね、神谷さんより貴重な話を聞かせてもらうことができ喜んでいきます。今回は金さんから今までの生い立ちやハンセン病の経緯などをお聴きしながら、今は少しでも伝えて行けるお手伝いが出来ればという思いで一杯です。

そして必ず寄せてもらうのは「慰霊碑」です。慰霊碑の前に立つ時、なんとも言えない気持ちになつてしまうのです。愛生園で亡くなった人達のこと、この世に出生することの出来なかつた子供たちのことを考えると、日頃自分の悩んでいることが甘く、ちつぽけなことかと痛感しています。いつの日か愛生園が本当に名の通り「愛の生まれる園」になるよう心から願ひ、世代に関係なく語り継げるよう発信していきたいと考えています。愛生園の景観も魅力の一つとなり、今後も時間の許す限り訪れたい所です。

齋 藤 正 宏

その日の長島は荒れ模様だった。低くたれ込めた暗い雲は、この地に隔離 収容されることで、肉親の絆や故郷を失ってしまった人々の孤独と重なり合い、沖合一面の波頭は、新薬によつて病か

ら解放された後も、人々を苦しめ続けてきた差別や偏見への怒りの形とも思えた。

しかし神谷氏の語り続ける言葉からは、怒りや恨みではなく、自らの命をかけて見つめ続けてきた心の葛藤を、歴史として伝えたいという、ひたむきな想いがひしひしと伝わってきた。

病が完治するようになって約50年余。隔離政策を継続してきた行政もさることながら、そうした人々を闇雲に恐れ、無関心を決め込み、関わりを避けようとする、私たち人間の心のひ弱さが問われている。問われているのは私自身の心だった。

翌日、からりと晴れあがつた青空の下、万霊山納骨堂に祈りを捧げた。法主様が語られた「宗教は福祉」という言葉の厳しき、険しさが思い起こされる。

杉 本 順 一

四十三年前、長島愛生園を訪問した時強く印象に残ったことがある。それは朝早くから大広間で何十人もの人たちががわいわいと賑やかに碁盤や将棋盤と向き合っていた姿である。

病気のせいで指先が不自由になつた人はスポンで碁石を置いていた。初めて見上げる姿だった。今年になって二度島をお訪ねした時、あの印象深い風景は見られなかった。それでも合併により瀬戸内市になつたのを記念して新聞社が主催する囲碁大会では愛生園の小田弥一さんに昨年は優勝、今年は準優勝だったとお聞きし囲碁への情熱が健在だったのが嬉しかった。

また日本においては「ライ」と言うたつた一つの病の存在がどれだけ多くの人達に「残忍なまでのリンチをうけ(森本春樹)」させてきたか。その究極の不条理が存在してきた事実の「語り部」を自認される神谷文義さんも健在である。

# 寸 莎

## 第77回

### 神谷文義さん

#### 語り継ぐ使命

昭和二十三年五月十一日午前五時。三〇メートルほど離れ、少し陰になった所で待っていた保健所の車は十九歳の神谷さんに乗せて走り出した。神谷さんはその時に初めて「ここは自分のふるさとであるが、おそらく二度とこの地を踏む事はないだろう、最後の見納めになるかもしれない」と思ったと言う。

神谷さんは、あらゆるものとの一切の別離を強いられ「別れの病氣」とも言われたハンセン病（かつては「らい病」と言われ、今では完全に治癒する病気である）を患った事で、国の政策（らい予防法）によって、現在岡山県瀬戸内市にある国立療養所長島愛生園に強制隔離された。

愛知県半田で高等小学校を卒業した神谷さんは、海軍の航空機を生産する工場に就職していた。しかしB



29による集中爆撃や東南海地震によって町は壊滅、生活は困窮した。終戦の二カ月前の話である。

昭和二十一年、顔の腫れや足の麻痺、火傷の症状から名古屋の大学病院にかかった時の病院側の態度から「ちよつと並の病氣やない、異常だと感じましたね」と言う。待合室の椅子にも座つてはいけな、脱衣した服も籠ではなく新聞紙に載せろと言う。大学教授とインタビューが二、三十名入ってきたの診察だった。

帰宅して三日後、警察がきて「お前らしい病氣らしいじゃないか、ちよつとどこが悪いか見せてみ。ここでは治せんから療養所に行かなあかんぞ。隣組で持ち回りの配給の仕事もお前のところはこれから町内の人と一緒にはできんぞ」と言われた。

それ以来、町の人達は神谷さんを避けるようになった。神谷さんも外へ出るのは日が暮れてからで、昼間

は本を読んで過ごした。「こんな状態だったら生活もできない、人になつても悪い、治るものであれば早く療養所に行つてくれ」、そんな心境になつていた。これらが長島に行く二カ月前までの話である。

ふるさとを発つて一夜明けた五月十二日早朝、虫明の港から船に乗せられ長島の収容桟橋に着く。愛生園での療養生活が始まった。

十八歳から二十三歳までの青年寮（約八十名）に入る。それからの七年というものは「病氣を治したい、家に帰りたい」という思いが孤独の中で神谷さんを支え続けたと言う。

当時使われていた大風子油（治療薬）は長くは効かず、半年もすると止まっていた病が進行して、もうダメだと覚悟し始めた頃、プロミンがハンセン病に画期的な効果を現した事で神谷さんは日増しに治癒していった。後に薬も錠剤に変わり家で治療が出来るようになり、昭和三十三年以降外へ帰る人も増えていった。

しかし、病は治癒に向かったにもかかわらず、園内では依然として職員と患者の区別はあり、世間の偏見と差別は厳しい状態であった。現在にあつても入園者の遺骨の九五パーセントは園の納骨堂に在り、国墓のお墓に入れた人は少ない。

そんな中、神谷さんは昭和四十四

年春、むすびの家で開かれた三泊四日の第一回囲碁将棋大会に参加。愛生園の囲碁将棋会と関西の各大学の囲碁将棋部のメンバーが集つた。「初めて社会に出て宿泊し健常者と触れ合つた経験でした。学生達が私達の事を理解した上で交流できた事は大きな垣根を越えたように思えます」。共に寝泊りし風呂に入り「私らの歯ブラシまで使つてる者もいて、ほんとに大丈夫かなと心配しました。度胸だめしに学生がやつとたんやないかと思うよ」と笑う。

平成八年、らい予防法は廃止されたが、社会での受け皿はいまだ少ない。また入所者の高齢化も進み、今後の療養所をどうしていくのかが問われている。

神谷さんは言う「私らが最後にやらなきゃならんのは、自分達の事じやなくて、納骨堂で眠っている先輩や療友達の無念さを忘れずに、気持ちだけでも引き継いで社会の人達に伝えていくのが私に残つている者の務めです。しんどいから嫌だからなんて事を言うわけにはいかない。残された時間が少ないから、余計大事な事と思えます」

「夏には光が丘の鐘撞き堂に登つて涼みます。遠くに小豆島の町並みの明りを見て私と妻はふるさとを思い出すんです」（聞き手〓李章根）

# AWTC日誌

10月13日 午前10時半より奈良パークホテルにおいて邑交会。  
 10月14日 裸会。自分を振り返り話（放）し合う時間を持ちました。

大倭町自治会秋のリクリエーションでキリンピアパーク神戸 インスタントラーメン発明記念館を見学、椎茸ランド「かさや」で芋掘りとパーベキュー。  
 10月15日 大倭神宮月次祭。  
 10月17〜20日 あじさい邑の中島知佐登さん（高校2年）が北海道へ修学旅行。

10月20日 KOMAカントリークラブで第9回大倭会ゴルフコンペ。初参加2人を加え10人。終了後、焼肉で懇親会。  
 10月22日 午後1時半より大倭安宿苑成立50周年記念事業後援会の決起大会が開かれました。  
 10月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和38年10月23日の法話テープをお聞きしました。  
 5時半から文化講演会の準備会が大倭会館で開かれました。  
 10月28〜29日 前日までの雨も上がってお天気に恵まれ、大倭会第296回文化行事秋の一泊旅行で淡路島 徳島方面を訪ねました。（12月号で詳細報告）

10月30日 この日は法主さんが須加宮旧蹟（現大倭紫陽花色）に遷られた満60年の記念日。紫陽花邑が還暦を迎えたことになりす。  
 11月1日 杉本朝順さんが東京から邑に戻って、大倭病院で仕事をすることになりました。  
 11月3日 馬場田で脱穀。快晴で機械も調子が良くはかどりました。昇ちゃんは早々に姿を消す。宴会用のテントもなく若い女性もいなかったから？ 子供達が田んぼや昼食の大倭会館で群れ遊んでいました。田植え以来、連続参加のFIWCの中西章文さんは子供に大人気。  
 高橋良美さんの話「平年より良。うるち。もち米とも、この10年間で3番目に並ぶ作柄で、次の1年間の神饌としてぎりぎり足りるかなあと思います」  
 11月5日 藤田啓子さんの声かけて杉本順一 高橋良美 見田暎子 松本モトさんが先日の大倭会一泊文化行事で慰霊のコースから外れていた淳仁天皇の母 当麻夫人のお墓を淡路島まで改めて訪ねました。  
 11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。  
 大倭安宿苑では  
 10月19日 年4回の理念研修第1回目を開催しました。  
 10月30日 須加宮寮 菅原園に奈良市の指導監査。運営は良好との講評でした。  
 （菅原園）  
 10月27日 秋の大運動会。仮装や綱引き、パン食い競争など大いに頑張りました。  
 （須加宮寮）  
 10月17〜18日 宿泊旅行で住苑者18名が、ポルトヨーロッパや南紀白浜アドベンチャーワールドで楽しみました。  
 （長曾根寮）  
 10月11・17日（デイサービス）  
 「トリップ」  
 「二人ジイバンド」のコンサートでは懐メロにしみじみ……。  
 10月14日 粘土細工作り。  
 10月25日 美容教室。  
 俳句の風物  
 上田森彦（97歳）  
 秋晴や波はなかりし片男波  
 川端茅舎  
 万葉集「和歌の浦に潮満ちくれば濁をなみ草辺をさして鶴鳴き渡る」（山部赤人）にちなむ地名を詠み込んで相乗効果をあけている。「ホトトギス」同人。  
 霧雨にひとりをおひ古都の鹿  
 森彦

（八重垣園）  
 10月17日 コーラスクラブで、「あの丘越えて」「手のひらを太陽に」「ここに幸あり」等を合唱しました。

## 日聖祭のご案内

◆平成十九年十二月二十三日（祝）

大倭六十四年 元旦

法主日聖師のお誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城にお参りして、午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。  
 ○午後一時より大倭安宿苑長曾根寮の《あじさい広場》で祝賀の直会演芸会が催されます。  
 ○昼食は直会弁当を用意しますので、どなた様もご遠慮なくご参集下さい。

\*\*\*

- 直会演芸会の係では、今年も出演される方を募ります。
- あなたのやりたい事をやって共に楽しんで下さい。
- 時間十分前後くらいです。
- 十二月十五日まで受け付けています。

直会演芸会実行委員会

TEL074-2144100-11番

青山法義・中島武宣

俳句投稿箱より 「霧ふかき朝稜線を隠しけり」「楼門は鎌倉の作秋ざくら」「秋の旅米寿卒寿のすこやかに」「新米や真珠に優る艶の良さ」

## ATMIC

\* 金鶏祭（大倭神宮）  
 12月4日（火） 午後2時より大倭神宮にて。  
 金鶏祭については、『やわらぎの黙示』百二十三頁「日本精神の源流」―長曾根邑のすめらみこと―参照。

\* 月次祭（大倭神宮）  
 12月6日（木） 午後2時より大倭神宮にて。  
 \* 大倭会主催第四六八回裸会  
 12月9日（日） 午前9時より恒例「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花色境内の大掃除です。これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

\* 月次祭（大倭神宮）  
 12月15日（土） 午後2時より大倭神宮にて。

\* 大倭神宮境内・周辺大掃除  
 12月16日（日） 午前10時より行います。有志の皆さんはご参加下さい。昼食はお弁当が用意されます。

\* 日聖祭（大本宮拝殿）及び直会演芸会

12月23日（日・祝）大倭元旦。  
 午前10時30分より祭典、午後1時より直会演芸会。（上記参照）